

第1回後志利別川流域生態系ネットワーク推進協議会 議事概要

〔日 時〕：令和8年7月22日（水） 15:00～17:00

〔場 所〕：今金町民センター 町民ホール

〔出席者〕：委員15名 総出席者数40名（WEB 出席含む）

1. 基調講演

- ・テーマ：「後志利別川流域生態系ネットワーク再生の意義」
- ・講師：北海道立総合研究機構 ト部 浩一 研究主幹
- ・要旨：講師自身はメップ川や須築川を中心にサクラマスの研究に携わってきたことから、本地域には深い思い入れがある。

後志利別川は、「清流日本一」に24回選ばれた全国有数の清流であり、その豊かな自然を象徴する魚種がアユとサクラマスである。アユは内水面漁業の重要な対象種であり、地域イベントでも親しまれ、サクラマスは沿岸漁業を支える重要な資源であり、いずれも地域を代表する魚種である。

一方で、アユは産卵に適した河床の減少、サクラマスは横断工作物による遡上阻害など、生息環境に課題を抱えている。朱太川においては河川整備と連携してアユ産卵場の造成が行われている。また、魚道整備によるサクラマス資源の回復事例があり、遡上環境の改善が資源回復につながる事が分かっている。一方、魚道は継続的な維持管理に大きな労力を要するため、近年では堰堤のスリット化による改良が進められ、魚類の移動性の向上と河川本来の環境の回復につながる成果も得られている。

以上を踏まえると、後志利別川流域の生態系ネットワークを推進するためには、良好な河川環境を基盤としながら、アユの産卵環境の改善と、サクラマスが産卵場所まで遡上できる環境の再生を進めることが重要である。また、生態系ネットワークは魚類の保全だけを目的とするものではなく、農業、水産業、観光など地域産業と連携し、地域の魅力や価値の向上につなげる取組として進めることが重要である。生態系の保全・再生と地域づくりを一体的に推進することが、生態系ネットワークの目指す方向である。

【主な質疑応答】

委 員：紹介された魚道整備の事例について、具体的にはどのような施工方法なのか。既存の工作物を切り下げたのか、それとも石を配置したものか。

講演者：この事例では取水機能を維持する必要があったため、工作物は切り下げず、石をコンクリートで固定した「多自然型魚道」を付設したものである。当時の農村振興課と連携し、遡上環境の改善により産卵域が上流へ拡大した成功例である。

2. 議事

（1）協議会の設立について

○事務局より設立趣旨案および規約案の説明。

委 員：設立趣旨にある源流部の記載に、「長万部岳」だけでなく地元に馴染みのある「カニカン岳」と「狩場山」も追加してほしい。

事務局：承知した。修正のうえで設立とする。

【会長の選任】

○委員の推薦により会長が選出された。

会 長：24 年前にこの地で研究を始めた縁を大切にしたい。生態系ネットワークの取組を地域の活力向上に繋げられるよう、皆さんと知恵を絞っていきたい。

（２）後志利別川流域生態系ネットワークの将来像と取組の方向性について

○事務局より 6 類型（縦断・横断・垂直等）の現状分析と、シンボル種選定について説明。

委 員：ロードマップには短期・中長期があるが、本協議会ではこれらを総合的に議論していく理解でよいのか。

事務局：その通り。幅広く議論いただきたい。

委 員：美利河ダムの減水区間について、現状の流量がアユ・サクラマスにとって科学的に十分なのか、検証が必要だ。また、横断的なネットワークの取組については、将来の河川整備計画における環境目標とも整合を図ってほしい。

事務局：より良い取組につなげられるよう、必要な調査や検討を進めていきたい。

委 員：期成会として国へ要望活動を行っている。そこでは「流域治水プロジェクト 2.0」に基づく河道掘削等の治水対策と併せ、生態系ネットワークの取組も今金・せたな両町で連携して進めることを要望している。

委 員：シンボル種について、後志利別川にはカワヤツメも生息しており、漁業との関わりも深い。今後の検討対象に加えてはどうか。

会 長：カワヤツメは非常に重要な種である。幼生が好む「緩やかな流れの泥場（ワンドやたまり）」が治水整備等で減少しているのが課題だ。生息環境部会で再生の可能性を検討したい。

委 員：カワヤツメの知見があるなら、今後の治水（掘削）対策と併せて、ワンド等のハビタットを創出する議論を本協議会で行うとよい。

○事務局より、「小さな自然再生」や「全体構想」の策定スケジュール等について説明。

会 長：本取組は 20～30 年という長期的な展望を持つものだが、短期的に実施できる部会を先行して動かすなど、できることから着実に歩みを進める姿勢が重要である。

委 員：地域づくり部会については、包括連携協定を結んでいる大学との連携も含め、地域活性化に繋がる多様な主体の参画も考えられる。

委 員：カワヤツメも検討対象に加えるのであれば、部会名称は「サクラマス・アユ」に限定せず、「魚類生息環境部会」などへ再検討すべきだと思う。

委 員：資料にある釧路の事例は、行政・民間・専門家・地域の農家などが一体となり、既存制度の壁を越えて現場の課題を解決した「小さな自然再生」の成功例である。

会 長：後志利別川流域の地域には、かつての自然再生の経験や魚道清掃活動など、地域が主体となって動ける高いポテンシャルがある。議論だけで終わらせるのではなく、現場で汗を流しながら取組を具現化していきたい。

（３）令和８年度の取組について

○事務局より、今年度の取組について説明。

会 長：先ほどの議論を踏まえ、第１回「サクラマス・アユ生息環境部会」については、今後は対象を広げ、「魚類生息環境部会」という名称で進めたい。

事務局：「魚類生息環境部会」ということで了解した。

会 長：「魚類生息環境部会」では、河川や河川工作物の管理に関わる多くの行政機関の方々から、事前に確認しておきたい情報があれば発言してほしい。事務局から補足事項があればお願いしたい。

事務局：今後、事務局から関係機関に個別に相談しながら、必要な情報共有を進めていきたい。アユの産卵場造成試行の野外実践では、関連団体にも参加いただき、取組を広げていきたい。

委 員：野外実践にはぜひ参加したいが、産卵床造成は技術的に難しい部分もある。アユの産卵環境に関する知見や経験のある方が調査されることが重要だ。

会 長：朱太川の事例でも、漁協からの情報は非常に重要だった。漁協の立場からのご意見やアドバイスを求める。

委 員：漁協としてもアユやヤツメウナギの産卵床を守ることは重要。固くなった河床を攪拌して産卵床を増やす取組に期待している。

委 員：美利河ダム下流の減水区間を毎年調査しているが、水量不足で沼地化というか、コケというか、私たちは「水が腐れている」と言っている。減水区間の流量を増やすことを検討してほしい。

委 員：現在の維持流量（0.5 m³/秒）の設定根拠は何か。

事務局：当初のサケ科魚類の遡上水深を確保する考え方に基づいている。

委 員：今は気候変動による水温上昇が大きな課題だ。水深だけでなく水温も考慮しなければサクラマスは生息できない。現在の科学的知見に基づき、必要なら見直すべきだ。

【閉会にあたって】

委 員（今金町）：生態系ネットワークの取組を環境保全とまちづくり・人づくり、産業に繋げ、他の流域にも広がるモデルになることを期待する。

委 員（せたな町）：後志利別川は、海に大きな恵みをもたらす。本流だけでなく支川の改善も進め、地域全体で環境を考える場として大切にしたい。

以上